

週に一度ある外科医長一行の回診時は婦長自らが若手ナースのOJT（職域訓練）を兼ねて先導し、各入院患者の状態をてきばきと説明する。滅多に姿を見掛けない外科婦長だが、患者を病状データで知悉している感じである。その婦長が珍しく単独でこの病室にも現れたのは師走二十七日の昼食後だった。見るからに眉目秀丽且つ凛として誇り高い印象の彼女が、年末の『外泊・外出希望』を相部屋一人一人に訊いて回ってくれた。但し、僕のベッドだけは素通りした。そして僕の左隣の藤木さんにこう声を掛けた。

「入院日からもうすぐ二十五日目になりますね。だったら、ちょうど一度はお家へ帰ってみたいくなる時期です」と傍目にも眩しい程の笑みを湛えながら、「毎日ご家族の方がみえていらっしゃるから特に不自由はないでしょう。でも、やはり気兼ねなく過ごすには病院とお家とは違うでしょう？ どうですか、お正月は奥様のお節料理も味わいたいことでしょうし、ご自宅のお風呂でゆっくり手足を伸ばしたいでしょう。点滴のことなら心配いりません。点滴管を少し残したまま上から貼る処置でお湯が入らない方法をお教えします。ン、それで大丈夫。もうすぐお正月ですもの藤木さん、外泊希望があったらどうぞ遠慮なく言ってくださいな、ねっ」と魅力的な首を少し傾げ、念を押すように肯いて見せた。鈴を振るみたいな優しい声に、男なら甘えハイ私そうしますと応じてしまいたくなる。更に彼女は丁寧に、「もしどうしても心配なら、無理せずに日帰り外出もできます。奥様やご家族とよく相談なさってね」と気づかった。

病院側にとってお正月とは目に見えない治療法の一環なのかも知れない。年末外泊希望についてはクリスマス頃から訪室の折にナースが話の切っ掛けにちょくちょく患者に尋ねていた。病棟の中は一般社会より思いがけぬほど律儀に季節毎の祭事変化を取り入れて患者の気分を解してくれようとする。例えば、クリスマス当日までは各病室のドア表に、待降節（クリスマス前の四週間）の目印が紅いリボンや南天の実を鏤めた青いモミの大きな輪飾りが懸けてあった。「病める者ここにあり、ここへこそ幸来たれかし」と願う如くである。病室を一步出てみると長い廊下天井の彼方まで星やモミの樹やロウソクなどの形を切り抜いた色紙細工が狭い間隔で吊り下がっていた。あの紙細工は走り回るナースに代わってボランティアの方々が手作りした贈り物だろうと思われた。そして、クリスマスが一夜明けたら棟内の西洋色はすっかり取り外され、模様替えとなっていた。既に正月用の松飾りと鏡餅のお供えとが鮮やかな緋色毛氈もうせんに載ってナースステーション前の棚に鎮座し人目を引いたのである。その朝、松飾りに気付いた患者は葉の緑に胸を突かれハッとさせられた。祭事への関心が薄れた現代でもお正月に喚起されるイメージはまだ心の寄りどころと成る重みがある。お正月は家族と一緒に炬燵こたつでのんびり過ごす習わしがあり、帰省する兄弟皆が実家に集まり両親の長寿を祝うという慣行が自然と心に浮かぶのだ。

隣の藤木さんは同じく此の二十七日朝、別のナースのゴメンネ杉田から、

「年末の外泊はどうするん、藤木さん決めたん？」と尻上りの上州訛りで訊かれた時、ぶっきらぼうに応じ、「面倒だからいいよォ」と言い濁していた。それなのに今は、婦長の向けた眩しい明眸めいぼうの前にたじたじとして、「夕方、ニヨンボが来たら相談してみます」と半分以上その気になったらしき郷里の角館かくのたて（秋田）弁であった。

同じ日の午後、点滴交換に来た若いナースのサンダー杉山に僕は心細く訴えてみた。

「さっき婦長さんが皆のところを回ってくれたとき、俺には年末の外泊希望を訊こうとしなかったんだけど、俺、その資格が無いのかな？」と問えば、ちょうど点滴落下を微調整した彼女は向き直り同情してはくれたが、「だって昨夜また吐血したばかりでしょ。外泊は無理よ。今朝は顔色が真っ青だったもの」と僕を諭した。言われてみればその通りだ。病院側がとっくに僕を外泊不許可リストに入れてあるのだと悟った。しかし、彼女は温かい声音で、「今は顔色が戻った。良かったね」と慰めてくれた。

実は昨夜寝ていたら急に胃から金属的な腐蝕臭が上がって来て気分が悪くなり、真夜中にトイレで吐いた。錆のように黒っぽい粘血だった。その気配に気付いた夜勤ナースが廊下を追ってきて僕の蒼白顔を見るや当直医を呼び、再び今朝、午前一番で胃カメラを呑んだばかりである。やっとならば三部粥に復帰していたが医師に再び禁飲食を宣せられた身だ。これでいよいよ僕の年越しは病院でと決まった。他の相部屋メンバーは如何なのか？

出入り口のすぐ左にいる高齢の中畑さんは本日退院予定だ。でも尻から白いものが漏れ出してしまうとの本人訴えでナースにオムツパックの付け方を今朝習った。午後、老父退院の挨拶回りの娘さんがティッシュを一箱ずつ同室者に配ってくれた。その向かい側にいる田代さんも胃潰瘍が治り明日の昼食後に退院予定だ。だから流行りのデジタルカメラで幼い末娘を撮る余裕の笑顔を見せ、間違いなく正月は自宅組だ。その一つ左の元気な豊島さんは元々が三十日の大安から二泊三日の外泊許可を家族がつよく希望していた。毎夕必ず世話に来る長女と弟嫁が、「お爺ちゃんが外泊しても風邪を引かないように万全の態勢が整えてあるからネ」と何度も言い聞かせており、大船に乗ったつもりで外泊日を待つ身だ。

だから、この部屋で年末居残りそうな組は僕を含め三人であった。一人は鼻の穴から食道や胃を通り越して腸内の奥深くまで長いチューブが挿入されている老人福祉ホーム居住の金井さんだ。そして、1クール（3週間）分の縮癌剤を肩口から点滴で二十四時間ぶっ続けに受けている藤木さんである。しかし、婦長の涼やかな誘い声に負けてどうやら藤木さんは転びかけている。彼の場合、奥さんと共に二人の子供が毎日やって来て枕元に二時間近くも坐ってゆく仲睦まじい家庭なのだ。特に妙齢の娘さんは父親思いで、彼の摂る病院食を一口も見逃すまいと見入っている。一々父親に食味を聞く。男なら一度でいいからあんな風に若い女性にじっと見詰められたいものだ。三人並んで坐っている奥さんと娘さんと息子は顔立ちがそっくりだ。藤木さんを見守る家族とすぐに分かる。その彼が抜けてしまったら頼りは一人で、その金井さんの場合、福祉ホームでも年末年始には職員が休暇をとる筈だから世話の手が不足するだろう。だったら病院に居たほうが好い。鼻からチューブも入っているし金井さんは残るはずと僕は踏んでいた。だが、そのチューブは今日の医長回診後、若い医師が一人戻って来て引き抜いた。すると沈鬱顔だった金井さんが途端に元気づいた。いつ外泊に気が変わるか知れない。で、僕の頭には六床のうち五床が空になった素っ気ない病室に、大晦日の夕方ポツンと独り蛍光灯に照らされている我が身の様が現実にはチラチラ浮かび始めた。思うだに心細い年の果てになりそうなのだ。実際その晩が来たら如何に惨めな気持ちに落ち込むことか。独りきりじゃ、恐らく周りの空白へ目も上げたくなからうと厭でも察しが付くのだ。病院の夕食配膳は間違っても六時前で常に早い。消灯は宵の口といってもいい定刻九時である。配膳してくれるナースが、大晦日は特別サービスだからと注文待ちのウェイトレス並に部屋の隅から僕の食事を見守ってくれるはずはない。ナースも確かに制服姿であるが笑顔で注文を受け

る仕事とはちょっと内容が違う。生ぬるい保温膳をベッドに置いてすぐ忙しく出ていってしまう筈だ。その次にナースが現れるのはこちらが急用で呼ばない限り、就寝前の検温だけである。寂しさに、叱られるのを覚悟で枕元のコールブザーを押すことは出来る。途端にナースステーションで『エリーゼのために』のチャイムがキンコロンと鳴り響きすぎさま、「ハイッ、如何しましたァ？」と天井のスピーカーから応答が降ってくる筈。まさか、「どしましたァ、その上州弁が聞きたかった」とは答えられそうもない。

また、コールブザーを押せば同時に病室の外に赤ランプが点滅するので、たまたま廊下にいたナースが見るよりも早くパタパタと駆け付けてくる筈。サンダー杉山と仇名した腕力自慢ナースなどは大江戸八百八町の火消並に飛び込んで来て熱い手で猛然と世話をし始める。だが、何でもないと判ったらえらく怒り出すだろう。客観的に考えてみれば、大晦日といってもナース勤務にとっては他の三百六十四日と何ら変わらない。だが、ここで世話になっている身にしてみれば病室での年越しを自分が望んだ訳でなく初体験だ。それでなくても年の瀬は心が暖気を求めるものなのにコトリとも物音がせず、白いシーツばかりで周りが空っぽの病室では余計に独り居は嫌である。年末の居残り組だけを集め、新たに一室を設けてくれたらと僕は願った。当然であろう。

さて、早くも十二月三十一日大晦日がきて夕食後は今年最後の本当に静かな晩になった。先に結論を言うと、この部屋は居残りが三名である。金井さん、藤木さん、それに勿論僕だ。ただし今は僕しかベッドにいない。他の五床は空だ。でも、あの二人が何処へ行ったのか分かっている。僕は胡坐に枕を載せ、新たに借りた本『トットの欠落帖』を読んでいる。語り口が可笑しくて此処が病室であることを忘れてしまう程だ。嘗ての看護学校生が寄贈した図書類が一階ロビー待合室の隅にある。今日昼は、伊予弁が溢れる『青春デンデケデケデケ』を借り出し、嘔き出してしまひながら読んだ。本の出版年度からいえば、看護術を学ぶ合間にこれを読んだ生徒さんも今は既に三十代半ば以上のベテランナースになっている筈だ。彼女らも僕と同じような箇所て笑っただろうか。そんな呑気な思いが頭に浮かぶのは病院へ避寒のバケーションに来たような寛いだ気分になっている証拠で、まさかこんな風にゆったり大晦日の宵を過ごせると数日前の僕はついぞ思いもしなかった。

金井さんは二日前の二十九日に、居残り組を自分から言い出して決めた。向こう端の窓際ベッドから僕に、「年末、家に戻るんですか？」と唐突に尋ねたのだ。直ぐ僕は応じ、「吐血したんで最初から外泊資格が貰えません」と苦笑いで答えた。

すると彼は、「じゃ、私もここで正月を一緒に迎えます。大晦日は私一人になるのかと心配していたんですよ」と、雲間から薄日の射すような笑顔になった。

一方、藤木さんの残留は本人以外の意志が働いた。彼自身は枕元にその写真を持ち込んでいる茶色い毛むくじゃらの飼い犬、長い舌を出した雌のゴールデン・レトリバーに家で会いたかったのだ。しかし今、師走の巷で大流行中のインフルエンザ感染を恐れた奥さんと特に娘さんから声低くしかも断固として外泊を阻止された。曰く、「お父さんの部屋は二階だし、一タトイレに降りて来なくちゃいけない。それにうちはここみたいには暖房が効かないのよ。凄く寒いんだから風邪をひく」という具合に甘苦く諭されたのだ。

確かに当部屋は、外科棟の一番端にあるせいか他の病室と違って暖房の吹き出し口が二つある。晩春並にポカポカ暖かく、真冬の今も半袖でOKだし額に汗が浮く程だ。藤木さん自身やはり流行り風邪が恐かったのだろうか、家族の阻止説得に却ってホッとした様子だ。敢えて、「外出したい」と固持しなかった。それに彼は大の風呂好きなので今日昼もナースに肩口の点滴カ所を防水処置して貰い、入院以来三度目の入浴をゆっくり済ませた。この四階外科棟の中央部にタイル張りの井桁型湯殿があつその熱い湯に藤木さんは一時間近く入ってきた。「大晦日であっても、いえ大晦日だからこそ入りなさいな」とベテラン別府ナースの勧めた風呂は、一人の入浴毎に清掃し熱いお湯を張り替えるりッチなものだ。個々の家庭では、せわしい大晦日にとってもそんな贅沢は出来やしない。さっき面会刻限午後七時直前に藤木さんの家族が枕元から立ち上がった。ベッドの父親が何時ものようにチャンチャンコを羽織って点滴柱を押し、二人の子を先頭に一家が離れ離れにならぬ固まりを保ちながら、長い廊下をエレベーター前まで歩いて行った。常は父親が一階フロアまで降りて三人を見送る。だが今日は、下りのエレベーターに乗ったのは家族だけだ。というのも今日の一階は夕方から人氣が絶えて照明の多くが消され、寂しくなっている。お父さんに、そういう所へ降りてきて欲しくないと言った娘が気を利かせたのだ。確かにそれは言っている。藤木さんはエレベーターの扉が閉まる直前に、家族三人へ小さく手を振った。そして戻る途中、そのまま他の病室に立ち寄った。やはり居残り病友のベッド脇に腰をおろし雑談を交わしている。入院の当初藤木さんは一時そちらの病室にいたのだ。胃の全摘手術前より八キロも痩せた病友大山さんの新情報で、今外科棟の居残り組が男性18名に女性12名というのを聞かされていたのである。試算するに入院数の六割強にあたる高い居残り率である。外泊を望んだ人は当初の僕の想像より意外に少ない。何故なのだろうか？ そうか、とやっと気付く。常食を摂れない身でうっかり病院から外へ出るのは無理なのだ。胃潰瘍患者の僕自身ごく柔らかな献立に関しては同類だ。病人の給食はそれぞれの回復状況に応じ一人一人内容が違う場合もある。廊下の一カ所に貼られた常食献立表にある今夕の惣菜内容をさっき見て来た。僕が此の常食と出会える迄なお遙かな献立一覧なのである。見たら、ざっとこうだ。『マグロ照り焼き、ほうれん草浸し、<sup>えんどう</sup>豌豆とモヤシと鶏ひき肉炒め、なめこ汁、ご飯、牛乳。エネルギー820Kcal／蛋白質31.3g』である。この献立が出される回復期の患者こそ汝幸いなるかなで、天国を見たに等しい。三日前の夕方、禁飲食が解けたとき僕のお膳はこうだ。『煮干し粉が溶け入ったらしい半透明のお汁、卵の黄みの味だけがするお汁、微かにミルクキャラメルの味がするオートミール、叩き潰した生野菜、飯粒の形の無い重湯』を出され、一口啜ってみて絶食後のその美味に大感謝し頂いた。そんな身が年末外泊などという大望を抱いちゃいけないのである。本の続きを読んでいると、金井さんが夕食後の一服を終え戻って来た。彼は僕のベッドの裾に立ち止まった。一呼吸置いたのは何か伝えたそうだった。

「いやァ、いま泌尿器科の病棟を覗いてきたんだ。向こうは凄いと重要な拾い物でもしてきたように言った。「人がいなくて部屋がガラガラに空いて、あれは寒々しいねエ」

泌尿器科は、此の西外科棟と曲がり廊下で一つに繋がっている東病棟にあり、「向こうはずいぶん病人が帰ってしまったんだ。見たら一人でぼつんと残っている部屋が幾つかある。空きベッドをついでに消毒したのか、シーツも剥いであってマット生地が剥き出しさ。生地は黒っぽい緑だね、初めて知ったよ。ベッド周りのカーテンも全部開け放ってある。だから部屋全体が薄暗くて、そこに一人でいる眺め

がそれは寒々して寂しい。あれは惨めだよ」と結論を言って、「あっちに比べ此処は明るいね、お祭りみたいだ」

金井さんはテレビを点けた。チャンネルを回してあちこちの局を探っている。新聞がないから目的の番組を探す感じではない。やがて、年末特集の賑やかな漫才を選んだ。『あと三時間なんぼで今年も行きまっしょないか。さいなァ、君んとこの嫁はんがな云々』と関西弁が聞こえた。生放送なのか振り袖姿が大勢いる会場から盛んな笑い声が起きている。このまま夜っぴいて新年を迎える恒例の番組らしい。金井さんは勿論最後まではこの番組を見られない。テレビは午後九時で一斉に切れるのだ。

実は情けないが患者の間で、テレビ放映に関し虚しい噂が出ていた。事によったら病院が規則をゆるめて大晦日はテレビを特別に遅くしてくれるんじゃないかと。だが今日になってその薄い期待は空振りだと判った。九時定刻消灯時にいつも通り自動的にテレビ放映は消えるのだ。しかし、病室の年越しが初めてでまだ誰も大晦日の夜九時を経験していないので、もしやという期待感が微かにあった。それで一所懸命ナースに問うたが、優しい彼女達は病人の淡い願いを哀れと思ってか、「TVは大晦日も同じだと思うけど。でも分からないな」と泣き止んだ赤児をあやす様な答えしか戻って来ないのだ。でも、いよいよその晩になってみたら放映の件はどうでも好いと思えてきた。病人は真夜中までテレビで何か見たい訳じゃない。第一その体力も無いのだ。皆がなぜあれ程、大晦日は夜九時過ぎてもテレビが映ると噂していたのだろう。それは、やはり各自の胸の中にこの一年と別れ難い思いの為か。だがそれも時間が滑らかに過ぎる日常によって身心を、無意識の執着から解き放ってくれた。夕食後、就寝までの数時間は常の晩の如く平凡に過ぎた。寝る支度をしに行く洗面所や廊下で他の患者と擦れ違ってもパジャマ姿で病み<sup>やつ</sup>寝れた顔同士が、「では良いお年を」とか「そちらこそ良いお年を」等と社交辞令で言い交わし合う声は無かった。

就寝前の検温にやって来たゴメンネ杉田に、藤木さんが詰まらなそうに尋ねた。「ねえ、看護婦さん、初詣では行くんだろ？」と又々懲りずに。実は今日、彼は朝から別段何気ない口調でこれをどのナースにも訊いていた。彼女等の返事は意外なものだった。職業柄か皆そろって一様に、初詣でをととても大事に思っているのだ。

「あすの朝、高校時代の友達と待ち合わせて行くことになっている」とか、「今夜お勤めの帰りに家の近くの神社に寄るつもり」とか、「正月二日に実家へ戻ってから」とか、とにかく参拝には行くと全員が答えた。正月の神社で一年の幸いを祈るなんて非科学的だと思うが、大勢の病者と過ごす毎日が道連れ旅の如き所為だろうか。検温するゴメンネ杉田は、今夜も医療ワゴンから定量を採って来て金井さんと藤木さんに色の違う通じ薬を手渡した。明朝の排使用である。この薬は効かないみたいだと言いながら藤木さんは貰っている。一方金井さんは、こっちの方がよく効くと言って二人で互いの薬を見比べることがある。毎晩二人が通じ薬を番茶で飲む音でもって僕は今日一日が過ぎたような気がするのだった。「今年も、終わったかァ」胃ガンを患う藤木さんの低い呟きが、この晩は聞こえた。

早朝六時半前、まだ夜気の色が残る薄明の元旦だ。ベッドを降りて窓のカーテンを開け放ちガラス面の結露を藤木さんが手で拭う気配がした。「晴れだよ」彼の声が聞こえた。と同時に、本年第一号の救急車がピーポー・パーポーと遠くから独特のサイレンを鳴り響かせながら徐々に当病院へ接近し、やが

て真下辺りでぴたりと止んだ。辺りに静寂が戻った。入院中、既に何度この接近音を聞いたことか。多い日は七〜八遍も到着し、飯時をも真夜中をも厭わぬ救急搬送である。世は事も無く、とはとても思えぬ頻度だ。

「もうじき、日が出るよ」と藤木さんに呼び起こされ僕もベッドを降りた。

「日本では富士山頂の日の出が6時42分で一番早いそうだ」藤木さんがベッド横のテレビ画面を見ながらそう言った。もう同室のお二人は各々のテレビがボリュームを絞って点けてあった。金井さんは朝の一眼に出掛けて、今は居ないが、生中継のテレビが点けっ放しである。好い頃合に戻ってくるつもりだろう。TV画面はホバリング中のヘリコプターから俯瞰の富士山頂に旭光の射して重なる瞬間を待ちうけていた。恒例らしいその趣向が一つの放送局だけでない。それは双方二つのテレビ中継画違いで知れた。今頃は日本中の多くの家庭でも早起き鳥たちが、何方かこれと同じ画像を見ている筈だった。ちなみに四階の此处の窓辺から右手奥には、秩父山系の平たいシルエット上に覗く富士の尖がり帽子を、何の障害物無しに眺め得る。これは毎朝、日の出直後に朝焼け色の薄桃に染まる冠雪峰が、地表のモヤ越しに肉眼で見て取れた。早起き鳥の二人のお蔭で僕は入院の翌々日からほぼ毎朝ピンク色の富士を眺め得たのだ。それだけ毎日大気のきりりと乾いた快晴日が続いていたことになる。日の出は今朝当地では6時55分から7時の間だ。今は東の地平から少し上空まで丈低く濃いモヤの層があった。だから日輪の上端がモヤから覗き出るのは少し遅れるはず。だが、既に靄の下方から茜色の滲み出た東空に鴉がフワフワと幾羽も飛んでいた。明星が一つだけ雫の如く光り、東空上方の闇にくっきりとある。目を下げると、霜で白く凍てた道をもう歩いて来る人が見えた。ピーポー・パーポーと救急車の今年第二号が近づいた音。さっきのタイミングと五分の差も無かった。僕は廊下に出て、すぐ右手突き当たりの非常口から救急車の到着を見下ろそうとした。実を言えば日の出よりも、正月早々に働く緊急車輛を見たかったのだ。すると窓際に先客が一人いて、近付くと藤沢さんの病友大山氏が廊下のしばれる低温に震えていた。「明けましておめでとうございます」と、お互いに言って非常口窓際で彼と話した。大山氏は救急車到着を見たいのではなく、こう言った。

「さっき、マスクと綿入れの装備でナースに屋上へ連れていってもらったが日の出を待つ間に寒過ぎて降りた」とのこと。六階の屋上？ 胃を全摘した身でよくまあそんな無茶を思いついたものだ。話を聞くだけで寒気がした。高いこの四階から眺めても今朝の外界は寒気に沈み込んだ如き無風で、眼下に見渡す家々の屋根も屋上も道路も何処もかしこも厚ぼったい霜で白一色だ。ところが大山氏の相部屋は、まだ他の人がベッド周りのカーテンを閉め切り眠っている。だから独りごそごとと活動も出来ず、廊下北東端の此处から初日を拝むつもりになったそうだ。それならば、こんな所よりもっと条件の好い観覧席がありますと僕は応じ、「初日の出は、この窓の位置がちょっと左寄り過ぎて多分、駅裏の製粉会社のサイロ棟と重なって太陽が半欠けになるでしょう。初日見物なら是非うちの部屋へどうぞ。文句なしの特等席です」と。

だからやがて、白く輝く日輪の上縁が、地平の黒いモヤ槽を透かし気味にじわじわと現われ出た時に此の部屋で居残り組の我々が思わず上げた「おーっ！」という感動のざわめきには新来の大山氏も混じっていた。そして又更に他にもこの病室から洩れ出た話し声に引かれて、新たに入来のナースが一名いた。昨夜が夜勤第3直であった新人一ノ瀬ナースはさっきこう思ったそうだ、「せめて廊下の端から記

念に初日の出を待ってみようか」と一人でちょうど来てみたらしい。昨年四月採用の新卒ナースである。「病院で初日の出を見るのは初めてです」素直な彼女はそう言った。そうか、病棟での年越しは我々入院患者だけの初体験ではないのだ。

「初詣では、行くのかい？」例のごとくさっそく藤木さんに問われ、「はい。今朝、勤めの帰りに大日へ寄ります」と一ノ瀬ナースがはきはき答えた。

この大日とは、お隣の足利市にある古刹ほんなほ鑊阿寺の本尊で大日如来をさす。足利の人は鑊阿寺をそんな風に親しく呼ぶ。春の桜時、緑濃い夏の樹陰、黄葉の降りしきる秋、そして冬の日溜まりをも愛でて境内に遊ぶから彼女は足利の産だ。除夜の鐘から今朝にかけては多くの地元民が東西南北の楼門を潜り入って大日に詣でているはず。一方、既にテレビ画面は、ヘリコプター中継の富士山の背後に白い発光が昇って輝き、山頂と重なっていた。皆が拝したがる高貴な神々しさだった。テレビ画面と此処の空とを見比べてみた。太陽の出現は当地の方が数分遅い。だから今年は二度、初日を見ることになった。

「出た、黒っぽい霧にグブって紅い縁が覗いた。日が出てきたよ！」

東向き窓の彼方を指差して金井さんが言った。確かにそう見えたのだ。

「おおっ、テレビよりもずいぶん輪郭がくっきりしているじゃ？」と嬉しがったのは藤木さんだ。地表付近の黒いモヤがフィルター役で日輪の円弧を際立てていた。

入院患者四名、ナース一名の合計五人は期せずしてほぼ一斉にパンパンとリズムカルな拍手を打ち、その音が病室内に響いた。昇り出した日輪へ向いて皆が合掌し頭を垂れる動作がごく自然に出た。僕などは別に何を祈るでもないが、此の瞬間は目を瞑り、暫しじっと息を止めたのである。五人が期せずして皆そうしていた。まさか、こんな由緒正しい正月の朝を病室で迎えられるとは思わなかった。若く初々しいナースまでが一緒に手を合わせ、僕らと共に真剣に祈っているのだ。ナースと言うよりは今を誠実に生きている一人の若い女性の自然な慎ましい姿だった。白いナース服が慎ましやかだった。

「どんどん上がる。早い。これなら昇りきるまで三分かからない」と僕は測った。

藤木さんが、「ほら看護婦さんももっと前に来て。見て、見て最高だじゃ」と、後ろ脇にいる遠慮がちな一ノ瀬ナースを招き、彼女を四人の間にまぜた。じわじわ昇りだした旭日の照射に初めて顔面が薄紅く染まった。年齢のずいぶんちがう五人がこの時、期せずして窓ぎわに横一列に並んで立っただのである。日輪の下端がついに黒いモヤの層を離れ、巨大な玉がふわりと空中に浮いた瞬間だった。その速度はうまく目で捉えられないが天体の運行を悟らす移動量を備えていた。昼の眩しさがまだ無い、黒紅色にくすむ巨眼が地上の一切を赤っぽく変えた。「大きい。本当に大きいですね。来て良かったです！」と新米ナースは感激に震えているような声を上げ、「怖いような光の色。どうしてこう見えるんだろう？でも太陽ってきれい」若い彼女ひとりだけがそう嘆声を上げたのではなかった。他の皆も、「すごい、まん丸だ」とか「こんなに大きかったのか」と口々に言った。

昇った旭日は、窓ガラスを通してさえ頬にツンツン当る熱い火矢を送って来た。真冬とは思えぬ太陽光線がエネルギーに満ちているのを改めて感じた。このエネルギーを受けることによって地球は、生きとし生けるものを創り出し存続させてきた。我々もその幸に預かった一片の瞬間的な命にしか過ぎない。五人は暫し、ここが病室であることや窓辺を離れるのも忘れ、自然の荘厳さに見惚れていた。たった数分にしても新年の始まりに偶然ながら日輪は五人を同じ気持ちに導いてくれた。思い出せるがそれを一

言で表わすのは難しい。多分それは、日の出の太陽を皆で一緒に見る、たったそれだけのことで人間は畏敬と喜びとを共有することが可能な存在だという単純素朴な事実である。

☆

初日の出と同じく、此の元旦に出された給食のことも忘れられない思い出だ。いつも通りのものが来ると思っていたら違った。居残り組全員に、九回裏ツアーアウト満塁逆転さよならホームランの如き奇蹟が起こったのだ。定刻八時前、紅白の幕引付き折詰がお膳に載って配られた。折詰はおかずだけが詰まっ  
ていて、お粥は別添えだった。膳には他に何か載っていた気もするが、目はこの大型折詰のおかずの豪華さに吸い寄せられてしまった。ひい、ふう、みい、ようと品目を数えて見回す目が驚きで丸くなり身震いしそうになる嬉しい衝撃だった。患者の予想しなかったお節料理が彩り良くきちんと並んでいた。『数の子・赤魚焼き・茹<sup>ゆ</sup>で海老・蒲鉾・伊達巻・黒豆・きんとん・大根と人参の膾<sup>なます</sup>・煮しめた小さな鯛・栗・里芋・昆布・莢豆・レタス・サクランボ・蜜柑』等々、ざっと十六種類にも達する頼もしい面々であった。何だか生まれて初めてお節料理を食べる気がした。幸せと思い、面倒くさがり屋の僕が海老の殻を指で剥いて頂いた。お二方側を見たら窓からの凄い日差しで部屋は明るく暖かく、藤木さんも金井さんも長めの寿箸を手にし暫し病む身を忘れ、群馬県庁前を出発する恒例の駅伝大会に見入り、此のひとときを楽しんでいた。寿の金文字が押された箸袋に『幸福な一年でありますようにお祈り申し上げます』と挨拶があった。それを、しみじみ眺めた。改めて、ここで目黒の殿様ばりの感慨を言わせてもらうなら、「元旦は病院にかぎる！」のかも知れない。

以上